

第1回公認心理師国家試験 追試比較分析

2019年1月17日 河合塾 KALS

2018年12月16日（日曜日）に、北海道会場と東京会場で、第1回公認心理師国家試験の追試験が行われた。この追試験は、本試験と比較してどのような違いがあっただろうか。本資料では、本試験と追試験の差異を徹底分析する。なお、河合塾 KALS では2018年9月11日に、本試験の難易度や出題形式・ブループリントとの対応に関する分析速報を公表している。そちらも併せてご覧頂きたい。

1. 出題形式の比較

- ▶ 試験時間・問題数・マークシート用紙は本試験を踏襲。以下の点は全て本試験と同じ。
 - ・午前の部（10時～12時）、午後の部（13時半～15時半）各120分の2部構成。
 - ・午前の部・午後の部ともに、問題数は77題。全154題。
 - ・マークシート用紙はAとBのいずれかが渡される。用紙Aは塗りつぶす①～⑤が横にならんでおり、用紙Bは①～⑤が縦にならんでいる。試験問題に違いはない。
- ▶ 解答形式は本試験と同様、5肢択一（5つの選択肢から1つを選ぶ形式）、4肢択一（4つの選択肢から1つを選ぶ形式）、5肢択二（5つの選択肢から2つを選ぶ形式）の3種類。ただし以下の表1の通り、出題数は異なる。

表1 解答形式比較

解答形式	本試験		追試験		比較	
	問題数	割合	問題数	割合	問題数	割合
5肢択一	105題	68.2%	103題	66.9%	▼2	▼1.3
4肢択一	26題	16.9%	23題	14.9%	▼3	▼1.9
5肢択二	23題	14.9%	28題	18.2%	△5	△3.2

（表中の▼は、本試験と比較して追試験での減少を、△は増加をそれぞれ表す）

- 表1から、総問題数 154 問という縛りはあるが、5 肢択一、4 肢択一、5 肢択二をそれぞれ何問ずつにするかという縛りは設けていないことが分かる。目安としては、5 肢択一が7割弱、4 肢択一と5 肢択二が1.5割ずつ、といった所だろう。
- 追試験において、本試験より5 肢択二が5問増加したが、この内訳は知識問題1問、事例問題4問である。追試験も本試験と同様、知識問題1点・事例問題3点という配点ならば、5 肢択二の配点が13点分の増加となる。5 肢択二形式は適切な選択肢が1つだけでは加点にならず、2つ選択できて加点となるため、必然的に難易度が高くなる。よって、この5 肢択二形式の問題数増加は、「追試験の方が得点を稼ぎにくい」ことにつながると言えよう。
- 不適切な内容を選ぶ問題が、特定の番号帯に固めて配置されている点は本試験と同様。例えば、追試験の午前の部の32番～37番は、すべて不適切な内容の選択肢を選ぶ問題である。さらに本試験同様、「不適切なものを選びなさい」と下線も引いてある。
- ただし、問題数は以下の表2の通り、本試験と追試験で異なる。やはり、解答形式（5肢択一、4肢択一、5肢択二）と同様、適切・不適切をそれぞれ何問ずつにするという縛りはないようである。

表2 選択内容比較

選択内容	本試験		追試験		比較	
	問題数	割合	問題数	割合	問題数	割合
適切選択	127 題	82.5%	133 題	86.4%	△ 6	△ 3.9
不適切選択	27 題	17.5%	21 題	13.6%	▼ 6	▼ 3.9

※適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
 ※不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

- 午前の部・午後の部ともに一般問題 58 題のあとに 19 題の事例問題という構成は本試験と同じ。1つ1つの事例の文章の長さも本試験と同様で、5行～10行程度。

2. 問題の難易度

問題の難易度を以下の3段階で判定した。なお、この判定基準および、各設問の難易度の判定は河合塾 KALS 独自のものであり、日本心理研修センターが発表したものではない。

- ◇ 難易度A…正解することは難しいと思われる問題。
- ◇ 難易度B…解答に自信を持ちにくいと思われる問題。
- ◇ 難易度C…比較的答えやすいと思われる問題。

以上の基準で追試験全 154 題の判定を行った。その集計結果が以下の表3である（各問題の判定については本資料の巻末参照）。また、本試験と比較したものが、表4である。

表3 問題の難易度（追試験）

難易度	前半	後半	全体	割合
A	18 題	11 題	29 題	18.8%
B	32 題	29 題	61 題	39.6%
C	27 題	37 題	64 題	41.6%
全体	77 題	77 題	154 題	100.0%

表4 問題の難易度比較

難易度	本試験		追試験		比較	
	問題数	割合	問題数	割合	問題数	割合
A	9 題	5.8%	29 題	18.8%	△ 20	△ 13.0
B	81 題	52.6%	61 題	39.6%	▼ 20	▼ 13.0
C	64 題	41.6%	64 題	41.6%	-	-

明らかに目立つのは、追試験におけるA問題の増加である。

本試験は「できそうでできない」「分かりそうで分からない」問題が目立ったため、結果としてB問題が多くなった。だが、追試験は「ブループリントにも現任者講習会テキストにもないキーワードに関する問題」「かなり詳細まで把握していないと答えられない問題」が特に前半に目立ち、追試験の受験者は大きく混乱したことであろう。

だが、C問題の数は偶然ではあるが、本試験と追試験で変わらなかった。つまり、得点しやすい問題は、追試験でも用意されていたのである。A問題は「できそうで、できない」ではなく「できない」と明確に分かる問題であるため、割り切って捨て問にし、C問題を確実に得点した上で、B問題で出来るだけ多く得点する、という方針が望まれたであろう。

本資料作成段階でまだ追試験の合格発表がなされていないため、本試験で6割（138点）に設定された合格基準点が、追試験でも採用されるか不透明だ。今回の難易度でも本試験と同様に合格基準点が6割に設定されるのか、それとも難易度や受験者全体の得点も加味して基準点の変更がなされるのかは、注目すべき点である。

3. ブループリントとの対応（1）

公認心理師国家試験の数少ない事前の手掛かりとして、日本心理研修センターより発表された「ブループリント」がある。ブループリントとは公認心理師試験の設計表のことで、この設計表に基づき、公認心理師試験が作成されることが発表された。また、ブループリントには公認心理師試験における各項目の出題割合や主なキーワードが記載されていた。

では追試験は、ブループリントの内容がどの程度反映されていたのだろうか。そこで以下の基準で、追試験の問題を分類した。

- ○ …ブループリントに記載のキーワードが、直接的に出題された問題
- △ …ブループリントに記載のキーワードと、類似・関連した内容が出題された問題。
- × …ブループリントに記載のキーワードとの類似性・関連性がみられない問題。

この基準で事例問題 38 題を除く 116 題を判定し、本試験と比較したものが以下の表 5 である。なお、この基準と判定は河合塾 KALS 独自のものである。（各問題の判定は、本資料の巻末を参照。○・△・×の具体的な判定の例は、2018 年 9 月 11 日発表の本試験の分析速報を参照）

表 5 ブループリント反映度の判定比較

判定	本試験		追試験		比較	
	問題数	割合	問題数	割合	問題数	割合
○	62 題	53.4%	69 題	59.5%	△ 7	△ 6.0
△	47 題	40.5%	35 題	30.2%	▼ 12	▼ 10.3
×	7 題	6.0%	12 題	10.3%	△ 5	△ 4.3

- …ブループリントに記載のキーワードが、直接的に出題された問題
- △ …ブループリントに記載のキーワードと、類似・関連した内容が出題された問題。
- ×

本試験から追試験にかけて、○と×が増加、△が減少している。

本試験においては「この内容は、ブループリントに記載されていたキーワードとみなしても良いのだろうか？」と判定に迷う問題が多かった。結果として△が多くなった。

だが、追試験では判定に迷う問題が少なくなった。つまり、ブループリントに記載されているキーワードが直接的に出される問題が増えた反面、問 35「戸籍上の性別が変更できる要件」のように「明らかにブループリントに記載のない出題」も目立った。結果として○と×が共に多くなった形である。

とはいえ、本試験も追試験も、全体の9割前後がブループリントに記載のキーワードとその関連用語であることは間違いない。正直、ブループリントに記載のない問題（×問題）を追っていったら、どこまで勉強してもきりが無い。やはり今後も対策の中心は、ブループリントになるだろう。

4. ブループリントとの対応（2）

追試験の全ての問題について、どの大項目に相当するか判定し、本試験と比較したものが次ページの表6である。（各問題の判定は、巻末を参照）

なお、各問題がどの大項目に相当するかの判定については、河合塾 KALS 独自の判定であり、心理研修センターより発表されたものではない。（複数の領域にまたがる出題などの判定基準や判定の例は、2018年9月11日発表の本試験の分析速報を参照。）

表6 ブループリント大項目の分類比較

	内容	本試験	追試験	比較
①	公認心理師としての職責の自覚	5 題	6 題	△ 1
②	問題解決能力と生涯学習	1 題	1 題	-
③	多職種連携・地域連携	1 題	2 題	△ 1
④	心理学・臨床心理学の全体像	3 題	3 題	-
⑤	心理学における研究	4 題	3 題	▼ 1
⑥	心理学に関する実験	4 題	3 題	▼ 1
⑦	知覚及び認知	4 題	4 題	-
⑧	学習及び言語	2 題	3 題	△ 1
⑨	感情及び人格	3 題	5 題	△ 2
⑩	脳・神経の働き	5 題	4 題	▼ 1
⑪	社会及び集団に関する心理学	2 題	5 題	△ 3
⑫	発達	8 題	6 題	▼ 2
⑬	障害者（児）の心理学	4 題	3 題	▼ 1
⑭	心理状態の観察及び結果の分析	12 題	15 題	△ 3
⑮	心理に関する支援	12 題	9 題	▼ 3
⑯	健康・医療に関する心理学	15 題	10 題	▼ 5
⑰	福祉に関する心理学	10 題	13 題	△ 3
⑱	教育に関する心理学	16 題	13 題	▼ 3
⑲	司法・犯罪に関する心理学	7 題	7 題	-
⑳	産業・組織に関する心理学	10 題	8 題	▼ 2
㉑	人体の構造と機能及び疾病	5 題	4 題	▼ 1
㉒	精神疾患とその治療	10 題	8 題	▼ 2
㉓	公認心理師に関する制度	11 題	17 題	△ 6
㉔	その他	0 題	2 題	△ 2

表6を見ると、「⑩健康・医療に関する心理学」の問題数減、「⑬公認心理師に関する制度」の問題数増加が特に目立つものの、大半は本試験と変わらない結果となった。上記の⑩と⑬について、問題作成者は⑩として作成したつもりであっても、問題内容が制度や法令が関係するため、河合塾 KALS の分類では⑬になっている可能性がある。よって「⑩健康・医療に関する心理学」の出題が少なくなったという結論は早計である。

次の表7では、ブループリントに記載されている出題割合から算出される問題数（表中では「計算上」と、本試験・追試験の出題数の平均値を比較した。

表7 ブループリント大項目・出題割合に基づく問題数との比較

	内容	計算上	平均値	比較
①	公認心理師としての職責の自覚	13.9 題	8.0 題	▼ 5.9
②	問題解決能力と生涯学習			
③	多職種連携・地域連携			
④	心理学・臨床心理学の全体像	4.6 題	3.0 題	▼ 1.6
⑤	心理学における研究	3.1 題	3.5 題	△ 0.4
⑥	心理学に関する実験	3.1 題	3.5 題	△ 0.4
⑦	知覚及び認知	3.1 題	4.0 題	△ 0.9
⑧	学習及び言語	3.1 題	2.5 題	▼ 0.6
⑨	感情及び人格	3.1 題	4.0 題	△ 0.9
⑩	脳・神経の働き	3.1 題	4.5 題	△ 1.4
⑪	社会及び集団に関する心理学	3.1 題	3.5 題	△ 0.4
⑫	発達	7.7 題	7.0 題	▼ 0.7
⑬	障害者（児）の心理学	4.6 題	3.5 題	▼ 1.1
⑭	心理状態の観察及び結果の分析	12.3 題	13.5 題	△ 1.2
⑮	心理に関する支援	9.2 題	10.5 題	△ 1.3
⑯	健康・医療に関する心理学	13.9 題	12.5 題	▼ 1.4
⑰	福祉に関する心理学	13.9 題	11.5 題	▼ 2.4
⑱	教育に関する心理学	13.9 題	14.5 題	△ 0.6
⑲	司法・犯罪に関する心理学	7.7 題	7.0 題	▼ 0.7
⑳	産業・組織に関する心理学	7.7 題	9.0 題	△ 1.3
㉑	人体の構造と機能及び疾病	6.2 題	4.5 題	▼ 1.7
㉒	精神疾患とその治療	7.7 題	9.0 題	△ 1.3
㉓	公認心理師に関する制度	9.2 題	14.0 題	△ 4.8
㉔	その他	3.1 題	1.0 題	▼ 2.1

表7で目立つのは、①～③の少なさと、②③の多さである。

①～③の少なさの理由について、河合塾 KALS の本試験・分析速報における以下の見解を再掲載する。

「しかし、それでも目を引くのが大項目①～③の「公認心理師の職責」関係の出題の少なさである。(中略)大項目①の中に「心理検査」「心理療法」「チーム医療」「虐待への対応」「スクールカウンセリング」という他の大項目と明確に重複するキーワードも含まれていたことが原因だろう。例えば「心理検査」の問題は、河合塾 KALS の分類では大項目⑭「心理状態の観察及び結果の分析」に入れたが(入れざるを得なかったが)、問題作成者は大項目①として「心理検査」の問題を作った可能性がある。結果として大項目①～③と判定された問題数が極端に少なくなってしまった可能性がある。」

続いて、②③の多さについて考察する。

②「公認心理師に関連する制度」は、公認心理師試験前から注目を集めていた分野であり、本試験でもブループリントの出題割合を越える問題数が出題されていたが、追試験ではさらにそれを上回る問題数が出題されていた。前述したが、問題作成者が⑯～⑳の領域として作成した問題でも、制度や法令が関係する問題は河合塾 KALS の分析において全て②③に分類している。②③で、出題割合を大きく超える問題数が出題されていたのは、そのためかもしれない。

だが本来⑯～⑳に分類されようと②③に分類されようとも、明らかになった重要な事実は、「制度や法律の知識を要する問題は、多く出題される」ということである。公認心理師は、心理学に関する知識のみならず、専門家との効果的な連携を果たすために「公認心理師に関連する制度(関係行政論)」に関する理解が必要であるということが、本試験と追試験の2つの試験問題から明確に示されたと言えよう。

他の大項目については、出題割合に近い問題数であり、計算上の問題数とのズレも「各問題がどの大項目に該当するか」という判断に伴う誤差の範囲と考えられる。基本的に公認心理師国家試験は、ブループリントの出題割合に近い形で出題されていると思って良いだろう。

5. 総評

最後にまとめとして、追試験を表すキーワードを2つ挙げたい。

1つは「難化」である。5肢択二問題の増加、難易度 A 問題の増加、ブループリント判定×問題の増加…など、全体的に難易度が上がったと考えられる要因が複数ある。この難易度が今後も続いていくのか、それとも本試験に近い難易度に戻るのかは不明であるが、これ以上さらに難易度が上がることは考えにくい（いわゆる「平均への回帰」である）。今後の公認心理師受験者は、「本試験以上追試験以下」の難易度を想定した対策を進めていくことになるだろう。

もう1つは「明確化」である。本試験終了後には、問題の解釈を巡って多くの議論が起こったが、追試験終了後には多くの議論は起こったとは言い難かった。もちろん受験者数の明らかな違いがあり、議論に参加できる人数がそもそも少なかったことが大きな原因であろうが、本試験では「日本語として様々な解釈が出来る問題」「捉え方によって解答が変わる可能性がある問題」が多かったことに対し、追試験ではそのような問題は少なかったことも、一因として挙げられる。不明確な出題が多かったが故に「迷う」ことが多く「国語力」を要した本試験に対し、明確な出題が多いゆえに「分かる」「分からない」がはっきりしており、「国語力」の問題にはならなかったことが、追試験の特徴である。

問題が明確になったことは、公認心理師試験がより公平で適切な国家試験になったと考えられるため、歓迎すべきと言えよう。また、問題が明確になったということは、より知識量・理解の深さが反映される「実力重視」の試験になったと言える。今後の公認心理師試験の受験生は、表面的なテストテクニックではなく、心理学に関する知識・理解と関係行政論に関する知識・理解を、時間をかけて深めていくことが求められるであろう。

なお現在、河合塾 KALS では本試験・追試験の内容を踏まえ、2018 年度に実施した公認心理師講座を再編成し、開講の準備を進めている。本資料や、分析速報の分析も存分に活用し、データに裏付けられた講座編成が行われている。2019 年度に公認心理師国家試験を受験する予定の方も、今後受験する予定の方も、ぜひご期待頂きたい。

2019 年 1 月 17 日
河合塾 KALS

6. 卷末資料 公認心理師国家試験・追試験 各設問分析

BP…ブループリント大項目の番号。

反映…ブループリントの内容がどの程度反映された問題であったか。

- ○ …ブループリントに記載のキーワードが、直接的に出題された問題
- △ …ブループリントに記載のキーワードと、類似・関連した内容が出題された問題。
- × …ブループリントに記載のキーワードとの類似性・関連性がない問題。

難度…問題の難易度がどの程度であったか。

- 難度A…正解することは難しいと思われる問題。
- 難度B…解答に自信を持ちにくいと思われる問題。
- 難度C…比較的答えやすいと思われる問題。

解答形式…マークシートを塗りつぶす内容はどうか。

- 5肢択一 …5つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 4肢択一 …4つの選択肢から1つを選ぶ形式。
- 5肢択二 …5つの選択肢から2つを選ぶ形式。

選択内容…どのような内容を正解として答えるか。

- 適切選択…「正しいものを選びなさい」「最も適切なものを選びなさい」などの形式。
- 不適切選択…「誤っているものを選びなさい」「最も不適切なものを選びなさい」などの形式。

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
1	①	公認心理師の登録取り消し	○	C	5肢択一	適切選択
2	①	危害を加える可能性のあるクライアント	△	C	5肢択一	適切選択
3	②	スーパービジョン	○	B	5肢択一	適切選択
4	④	ゲシュタルト心理学の現在	○	B	5肢択一	適切選択
5	④	W, Wundt の心理学の特徴	○	C	5肢択一	適切選択
6	⑤	観測変数と各因子の相関係数	○	A	5肢択一	適切選択
7	⑦	心理物理学的測定法	○	A	5肢択一	適切選択
8	⑨	人格の個人差に関する行動遺伝学的説明	○	B	5肢択一	適切選択
9	⑩	記憶障害	○	B	5肢択一	適切選択
10	⑪	他者の行動に対する評価	△	B	5肢択一	適切選択
11	⑭	最も適切な検査の選択	△	A	5肢択一	適切選択
12	⑬	障害のある児童生徒への合理的配慮	○	B	5肢択一	適切選択
13	⑭	心理アセスメントにおける情報収集	○	C	5肢択一	適切選択
14	⑭	関与しながらの観察	○	C	5肢択一	適切選択
15	⑭	NEO-PI-R	△	A	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
16	⑭	初回面接でのクライアントとの関わり	○	B	5肢択一	適切選択
17	⑯	バーンアウト	○	B	5肢択一	適切選択
18	㉓	中核症状とBPSD	△	B	5肢択一	適切選択
19	⑪	マルトリートメント	○	C	5肢択一	適切選択
20	⑲	非行	○	B	5肢択一	適切選択
21	⑱	不登校	○	B	5肢択一	適切選択
22	⑲	RNRモデル	×	A	5肢択一	適切選択
23	㉓	過労死等の労災補償状況	△	A	5肢択一	適切選択
24	⑦	記憶	○	B	5肢択一	適切選択
25	⑰	認知症	○	A	5肢択一	適切選択
26	㉑	がん患者とその支援	○	B	5肢択一	適切選択
27	㉓	神経性無食欲症	△	B	5肢択一	適切選択
28	㉓	精神科へ紹介すべきもの	○	C	5肢択一	適切選択
29	㉓	学校教育法	○	A	5肢択一	適切選択
30	㉓	学校運営協議会制度	×	A	5肢択一	適切選択
31	㉓	医療観察法	○	A	5肢択一	適切選択
32	⑫	知能とその発達	○	C	5肢択一	不適切選択
33	⑫	高齢期に関する理論と心理的適応	○	B	5肢択一	不適切選択
34	⑭	心理アセスメント	○	C	5肢択一	不適切選択
35	㉓	戸籍上の性別変更要件	×	A	5肢択一	不適切選択
36	㉑	特定妊婦のリスク要因	×	A	5肢択一	不適切選択
37	⑰	認知症のケアに用いる技法	○	C	5肢択一	不適切選択
38	⑯	チーム医療	○	B	4肢択一	適切選択
39	⑧	オペラント条件づけと逃避学習	○	C	4肢択一	適切選択
40	⑧	言語の音韻面の発達	△	A	4肢択一	適切選択
41	⑬	精神障害に対するスティグマ	×	B	4肢択一	適切選択
42	①	要支援者の個人情報とプライバシーの保護	○	C	4肢択一	適切選択
43	㉓	いじめ防止対策推進法、いじめの定義	○	C	4肢択一	適切選択
44	⑱	学校での子どもの行動観察	△	B	4肢択一	適切選択
45	㉓	スクールカウンセラー等活用事業	×	C	4肢択一	適切選択
46	㉓	労働者派遣法	○	A	4肢択一	適切選択
47	①	公認心理師法	○	C	5肢択二	適切選択
48	㉓	障害者総合支援法	○	A	5肢択二	適切選択

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
49	⑯	チーム医療と公認心理師が行う内容	△	A	5肢択二	適切選択
50	⑦	加齢の影響を受けにくい記憶	△	B	5肢択二	適切選択
51	⑨	感情の諸理論	△	B	5肢択二	適切選択
52	⑫	DSM-5, 神経発達症群	○	B	5肢択二	適切選択
53	⑮	精神力動療法	○	B	5肢択二	適切選択
54	⑯	労働者の職場復帰と主治医との連携	○	C	5肢択二	適切選択
55	㉓	児童福祉施設	○	C	5肢択二	適切選択
56	⑱	動機づけ理論	○	C	5肢択二	適切選択
57	㉔	SSRI の副作用	○	B	5肢択二	適切選択
58	㉓	高齢者虐待防止法	○	B	5肢択二	適切選択
59	㉔	27 歳女性・公認心理師の言葉	事例	C	5肢択一	適切選択
60	⑮	28 歳女性・認知行動療法	事例	B	5肢択一	適切選択
61	⑭	34 歳男性・検査所見より示唆される障害	事例	B	5肢択一	適切選択
62	⑰	84 歳女性・介護老人保健施設職員の対応	事例	B	5肢択一	適切選択
63	⑱	小学校での事件・公認心理師の対応	事例	B	5肢択一	適切選択
64	⑰	3 歳女児・考えられる障害	事例	C	5肢択一	適切選択
65	⑱	中学 2 年担当教師・公認心理師の助言	事例	B	5肢択一	適切選択
66	⑱	5 名の中学生・アンダーアチーバー	事例	C	5肢択一	適切選択
67	⑱	14 歳女子・スクールカウンセラーの対応	事例	C	5肢択一	適切選択
68	⑲	30 歳男性・専門プログラムと交通費	事例	A	5肢択一	適切選択
69	⑰	9 歳男児・虐待後の家庭復帰と施設の対応	事例	B	5肢択一	不適切選択
70	⑱	15 歳女子・スクールカウンセラーの支援	事例	C	5肢択一	不適切選択
71	㉔	23 歳女性・公認心理師の言葉	事例	C	5肢択一	不適切選択
72	⑭	24 歳女性・心理検査の選択	事例	A	5肢択一	適切選択
73	⑭	22 歳女性・MMPI の妥当性尺度	事例	B	4肢択一	適切選択
74	㉔	36 歳女性・社内相談室の公認心理師の対応	事例	C	4肢択一	適切選択
75	⑯	45 歳女性・公認心理師が行う提案	事例	C	5肢択二	適切選択
76	⑯	72 歳男性・認知症の妻を介護する夫	事例	C	5肢択二	適切選択
77	⑮	36 歳男性・治療法の選択	事例	B	5肢択二	適切選択
78	①	公認心理師の秘密保持義務違反	○	C	5肢択一	適切選択
79	③	公認心理師が関わる機関と介入方法	△	C	5肢択一	適切選択
80	④	人間性心理学	○	C	5肢択一	適切選択
81	⑤	心理学研究における観察法	○	C	5肢択一	適切選択

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
82	⑤	クロス集計法の連関の検定	△	C	5肢択一	適切選択
83	⑧	自己効力感	○	B	5肢択一	適切選択
84	⑨	感情と認知の関係	○	B	5肢択一	適切選択
85	⑪	援助行動と意思決定過程	○	B	5肢択一	適切選択
86	⑪	家族システム論	○	B	5肢択一	適切選択
87	⑬	聴覚障害	×	A	5肢択一	適切選択
88	⑫	DSM-5, 知的能力障害	○	B	5肢択一	適切選択
89	⑮	トークンエコノミー法	△	C	5肢択一	適切選択
90	⑭	各種心理検査	△	C	5肢択一	適切選択
91	⑭	内田クレペリン精神作業検査	△	C	5肢択一	適切選択
92	⑮	認知行動療法の人物・理論・技法	△	B	5肢択一	適切選択
93	⑰	ひきこもり当事者への訪問支援	△	C	5肢択一	適切選択
94	⑰	認知症と回復の可能性	○	A	5肢択一	適切選択
95	⑯	災害発生後早期の支援	△	B	5肢択一	適切選択
96	㉓	DV防止法	○	C	5肢択一	適切選択
97	㉓	生徒指導提要に示されている生徒指導	×	B	5肢択一	適切選択
98	⑭	幼児又は児童への司法面接	○	B	5肢択一	適切選択
99	⑩	睡眠	○	B	5肢択一	適切選択
100	㉑	ストレス反応	△	A	5肢択一	適切選択
101	㉑	神経疾患の判別	△	A	5肢択一	適切選択
102	㉒	境界性パーソナリティ障害	△	C	5肢択一	適切選択
103	㉒	錐体外路系副作用	○	C	5肢択一	適切選択
104	㉓	医療法	○	B	5肢択一	適切選択
105	㉓	精神保健福祉法	○	B	5肢択一	適切選択
106	⑲	非行少年の処遇	○	B	5肢択一	適切選択
107	㉓	労働・産業分野の法令	△	B	5肢択一	適切選択
108	㉔	心理支援活動の概念化・理論化・体系化	○	C	5肢択一	適切選択
109	⑰	子ども虐待対応の手引き	△	C	5肢択一	不適切選択
110	①	公認心理師の責務と職業倫理	△	C	5肢択一	不適切選択
111	⑫	青年期の特徴	○	C	5肢択一	不適切選択
112	⑯	コーピング	△	C	5肢択一	不適切選択
113	⑰	地域包括支援センター	△	B	5肢択一	不適切選択
114	⑲	法務省式ケースアセスメントツール	×	A	5肢択一	不適切選択

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
115	⑲	保護観察における専門的処遇プログラム	×	A	5 肢択一	不適切選択
116	⑳	ワーク・ファミリー・コンフリクト	△	B	5 肢択一	不適切選択
117	⑰	心的外傷後ストレス障害	○	C	5 肢択一	不適切選択
118	⑦	記憶	△	C	4 肢択一	適切選択
119	⑥	心理学実験	△	C	4 肢択一	適切選択
120	㉑	プロスペクト理論	×	A	4 肢択一	適切選択
121	⑮	作業同盟に問題がある場合の対処	○	C	4 肢択一	適切選択
122	⑭	KABC-II	△	B	4 肢択一	適切選択
123	㉑	安全文化の構成要素	○	A	4 肢択一	適切選択
124	⑨	感情の発達	○	A	4 肢択一	適切選択
125	⑱	内発的動機づけと外発的動機づけ	○	C	4 肢択一	適切選択
126	⑮	クライアントに関する個人情報の扱い方	○	C	5 肢択二	適切選択
127	⑩	間脳の解剖と機能	△	A	5 肢択二	適切選択
128	⑩	大脳の生理学的機能	△	B	5 肢択二	適切選択
129	⑭	新版 K 式発達検査	△	B	5 肢択二	適切選択
130	⑨	タイプ A 型行動パターン	×	B	5 肢択二	適切選択
131	⑰	少子高齢化が進むわが国の現状	○	A	5 肢択二	適切選択
132	㉓	児童虐待への対応	○	C	5 肢択二	適切選択
133	㉒	統合失調症の特徴的な症状	○	C	5 肢択二	適切選択
134	㉓	介護保険法	○	B	5 肢択二	適切選択
135	㉔	健康日本 21（第二次）	○	B	5 肢択二	適切選択
136	⑥	プライミング効果の実験	事例	C	5 肢択一	適切選択
137	⑫	40 歳男性・ライフサイクル論における危機	事例	C	5 肢択一	適切選択
138	⑭	4 歳男児・適切な心理検査の選択	事例	C	5 肢択一	適切選択
139	⑱	17 歳男子・スクールカウンセラーの対応	事例	B	5 肢択一	適切選択
140	⑮	20 歳男性・公認心理師が用いている技法	事例	B	5 肢択一	適切選択
141	⑰	84 歳女性・認知症初期集中支援チーム	事例	B	5 肢択一	適切選択
142	㉒	68 歳女性・認知症の症状	事例	B	5 肢択一	適切選択
143	③	9 歳男児・利用する機関の選択	事例	C	5 肢択一	適切選択
144	⑱	教員に対するスクールカウンセラーの対応	事例	B	5 肢択一	適切選択
145	⑱	9 歳男児・行動の説明	事例	C	5 肢択一	適切選択
146	⑲	5 歳男児・父母の協議離婚と面会交流	事例	C	5 肢択一	不適切選択
147	㉑	55 歳男性・多発する休職者に対する相談	事例	B	5 肢択一	不適切選択

問	BP	問題内容	反映	難度	解答形式	選択内容
148	⑥	怒りのコントロール法に関する実験	事例	B	4 肢択一	適切選択
149	⑱	15 歳女子・両親の離婚と学業不振	事例	C	4 肢択一	適切選択
150	⑪	14 歳男子・原因帰属理論に基づく対応	事例	C	4 肢択一	適切選択
151	⑮	30 歳男性・カウンセリング終結のプロセス	事例	C	4 肢択一	不適切選択
152	⑯	20 歳男性・医療保護入院と家族への説明	事例	C	5 肢択二	適切選択
153	⑯	50 歳男性・うつ病と自殺企図	事例	C	5 肢択二	適切選択
154	⑰	6 歳男児・考えられる心理的問題	事例	C	5 肢択二	適切選択

※表中の難易度や分類などは、河合塾 KALS の独自の判断によるものです。個々の理解や価値観により、難易度や分類は異なります。あくまで参考に留めて頂きたいと思います。

※本試験の難易度や分類は、河合塾 KALS の本試験・分析速報（9 月 11 日発表）をご覧ください。

※本資料の無断転載・無断転用を禁じます。